

# 普く諸の衆生と共に

——愚禿釈親鸞の名告りの意義——

## 延 塚 知 道

『教行信証』の後序、『親鸞聖人血脈文集』、『歎異抄』の註記に見られるように、親鸞は流罪以後いつの頃からか、自らを愚禿釈親鸞と名告ったようである。

流罪の地、越後での七年間、親鸞がどのような生活をしていったかは、愚禿釈親鸞という名告りの外に何の資料もなく、まったくわからない。恐らく、雪深い越後の国で親鸞が引き受けねばならなかったことは、越後の雪を全部背おう程の生活の重さではなかったであろうか。妻恵信尼と建暦一年に生まれた信蓮房とを両手に引き、冬の寒さに震え、雪の重さに文字通り押し潰されそうになりながら、大地を這うように生きたに違いない。そこで親鸞が生活を共にした人々は、

うみ・かわに、あみをひき、つりをして世をわたるものも、  
野やまにししをかり、とりをとりて、いのちをつぐともがら  
も、あきなみをし、田畠をつくりてすぐるひと

(聖全一七八四)

と言われる「あさましき愚痴きわまりなき」いなかの生活者達であった。生きる為に手段を選ばない群萌の中で、吉水時代法

然の下で確かに領いた本願の信が、苛酷な現実の批判によって鍛えられていったことであろう。その厳しい葛藤の中で、恐らく、親鸞は孤独と深い絶望とに幾度か涙したに違いない。

そこでは、裸の人間親鸞として師教に改めて問い直し、信仰が限りなく広く深まりを持っていたことであろう。その親鸞に確かに頷かれていったことは、共に生き共に死ぬという群萌の大地性である。石になることによってしか、生きる不安や苦しみから逃れられない最下層の人々を「いし、かわら、つぶてのごとくなるわれらなり」と親鸞は言う。そこでは、僧であることなどはるかに超え、群萌の大地に帰ってしかも自信に溢れた生活者親鸞の面影を見ることができると。この萌群の自覚の名告りこそ、愚禿という名告りであろう。

また親鸞という名告りが、天親、曇鸞に依るものであることは、後に親鸞が取り組んだ主著『教行信証』で、二廻向四法の綱格はもちろん、その重要な部分のほとんどが、『論』、『論註』で占められていることによって考えられることである。とりわけ、親鸞の信仰を決定した、師法然の「ただ念仏」の教えを、行巻では、不廻向の行として受け、不廻向の意義を他力廻向とし、更に「他力と言ふは、如来の本願力なり」と、念仏が本願力廻向の行であることを『論註』に依って明らかにしている。そして、その念仏の法こそ、「大乘は二乗・三乗有ること無し。二乗・三乗は一乗に入らしめんとなり。一乗は即ち第一義乗なり。唯是れ誓願一仏乗なり。」と、われわれの現実によさしく大乘の仏道を実現することが説かれている。

『教行信証』が大乗の論であることを思う時、善導、法然という純正浄土教の伝統に育くまれながら、自らも群萌として生きた越後の生活の中で、『論』、『論註』によりその信仰が鍛えられて、大乘を担う者という自覚にまで深められていったに違いない。

愚禿という名告りが、群萌の自覚を表わすものであるなら、親鸞という名告りは、愚禿のままに大乘の仏道を担う者という自覚を表わすものである。

以下、『論』、『論註』に依って、親鸞が愚禿釈親鸞と名告り得た内面的意義を尋ねてみたい。

## 一

『論註』の中に「共」という字を、上巻に五回、下巻に十回見い出すことができる。まず上巻の方は、『論』の廻向章の

我れ論を作り偈を説きて願わくは弥陀仏を見たてまつり普く諸の衆生と共に安楽国に往生せん（聖全一一三〇七）

の「共」を中心に五回見い出せる。特に曇鸞は、この廻向章の「普共諸衆生」に注目し、天親が共にという衆生が、どのような衆生かを八番の問答によって問うている。この八番問答を尋ねることによって共にいうことを考えてみたい。

まず第一問答では、『大經』第十七、第十八願成就文の「諸有衆生」に注目し、『觀經』下々品の文を引用して、天親が共に言われる衆生が、下々品の悪凡夫であることを明らかにしている。これで「問うて曰く。天親菩薩、廻向章の中に、普共諸

衆生往生安楽国と言へるは、此は何等の衆生を共に指したまふ耶。」という第一の問いには、一応答えたことになる。ところが曇鸞は、更に第二問答から第八問答を設け、第二問答から第五問答までは、五逆と謗法に注目して唯除の機を問い、第一問答の悪凡夫の内面的な意義を明らかにすると同時に、本願の機を明確にしている。そして、第六問答から第八問答までは、十念念仏の上に本願の真実が全現しており、自己の罪障の深さに執われて仏智の不思議を疑惑してはならないことが述べられている。それは、十念念仏が「無上の信心に依止する」ものであり、五逆十惡の惡業との質の違いによって明らかにされている。したがって、この八番問答は結局、「此の經を以て証するに、明らかに知りぬ。下品の凡夫、但正法を誹謗せざれば、仏を信ずる因縁をして皆往生を得しむ。」という第一問答の最後の一文に収まる。第二問答から第八問答までは、この一文の内面的な意義を七つの点で確認していることになる。

ここで注目すべきことは、第二問答から第五問答までに明らかにされている悪凡夫の内景が、曇鸞の機の自覚に基づいていることである。第二問答では、五逆謗法という『大經』の重罪と、五逆十惡という『觀經』の単罪との不撰が述べられ、第三問答では、重罪単罪という量の問題ではなく、五逆と謗法との質の違いを明らかにしている。更に『智度論』によって『大品般若經』を取意し、謗法罪の者の出地獄の時節のないことを經証し、人間の欲望の延長としての為樂願生の否定を理証している。第四問答では、謗法罪の罪相を明し、第五問答では、五逆

罪の根底に誹法罪があり、五逆よりも誹法罪の方が人間の根源的な罪であることを明し、先の五逆と誹法との撰不の論拠を明らかにしている。

このように曇鸞は、われわれの具体的な生活の中の五逆十惡の罪の根源に誹法罪があることを述べ、徹底して誹法の不生を論じている。誹法罪は、「仏無さず仏の法無し、菩薩無さず菩薩の法無し、と言わん」と、積極的に仏法を否定する相である。しかし、逆に言えば、誹法罪は仏法に遇ったからこそ明らかにする罪である。それはまた、五逆十惡というわれわれの具体的な生活の痛みを、唯一の契機として知らされるものである。もしそうでないなら、誹法罪は觀念でしかない。われわれの生活が、五逆十惡を一步も出ないものであるが故に、最も具体的なわれわれの生き様そのものが、誹法という罪を根底に持っていることになる。この誹法罪は、第六問答で、五逆十惡の罪業の重いことよって、「自ら虚妄顛倒の見到に依止し」仏智を疑うという、仏智疑惑の罪にまで徹底され、更に「曠劫より已來、備に諸の行を造りて、有漏の法は三界に繫屬せり」と宿業の自覚にまで徹底されている。

法の真実を疑うという罪を、「尋は衆生に属す」と端的に言い切ってしまう曇鸞は、人間存在そのものが、仏に反くという有り様しかないことを、徹底して明らかにしているようである。それは、「無尋光如来の光明無量にして、十方国土を照したるに障導する所無し」と言う世界に生きていながら、衆生の存在そのものが自ら尋を作っていることを意味する。唯除とは、

本願に唯除されるのではなく、本願の世界にいながら、自らの存在そのもので自らを本願の世界から唯除しているのではなからうか。「唯除五逆誹謗正法」とは、恐らく、そのような人間の存在構造を言い当てた教言であらう。同時にまた、唯除の機のままで、本願の内にいることを信知せしめる最後の手段だてもある。

このような、人間存在に対する徹底した自覚は、唯除の機という深い悲嘆とともに、確かに本願の世界にいたるといふ、法の真実なることを信知することでもある。しかし、その信知は、仏に反くという人間存在の中にあるべくもない。それは、『涅槃經』で「無根の信」と、阿闍世が感激をもって語っているものである。「無根とは、我初より如来を恭敬することも知らず、法、僧を信ぜず、これを無根と名づく」と言うように、それは、資格のないままに法の真実を信知せしめられたという深い感激の外にはない。曇鸞は、誹法は永遠に許せぬと言う。しかし、その裏には、信ずる者は皆往くという深い感激が湛えられているようである。

この八番問答で確認しておきたいことは、天親が共に言う衆生が、下々品の凡夫であり、仏智疑惑の罪を持つ者であるということである。唯除の文で少し尋ねたように、その罪を人間の存在構造そのものに見い出す時、仏智疑惑の者は、決して特殊な人ではない。共にその罪を担い、共に宿業に喘ぐ人々である。天親が永遠にたすからないものとして自己を発見する時、共にたすからないものとして、始めて見い出すことができる宿

業の大地とも言い得る人々であらうか。

一一

下巻では、「共」という字を全部で十回見出すことができる。今考えようとしている「普共諸衆生」と直接関係あるものを列記してみると、次のようになる。

(一)、廻向に二種の相有り。一には往相、二には還相なり。往相とは、己れが功德を以て一切衆生に廻施して、作願して共に彼の阿弥陀如来の安樂浄土に往生せしめむとなり。

(聖全一―三二六)

(二)、還相とは。彼の土に生じ已りて奢摩他・毗婆舍那方便力成就することを得て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向へしむるなり。

(聖全一―三二六)

(三)、夫れ衆生は別報の縁と為す。国土は共報の用と為す。

(聖全一―三三八)

(四)、一切衆生を撰取して、共に同じく彼の安樂仏国に生ぜんと作願せり。是れを菩薩の巧方便廻向成就と名づく。

(聖全一―三三九)

(五)、凡そ廻向の名義を釈せば、謂く、己れが所集の一切の功德を以て一切衆生に施与して、共に仏道に向わしむるなり。

(聖全一―三四〇)

(六)、此の中に方便と言ふは、謂く、一切衆生を撰取して共に同じく彼の安樂仏国に生ぜんと作願す。

(聖全一―三四〇)

一見してわかることは、(三)を除けば全て往還二廻向と関係し

た所にのみ、「共」という字が使われている。特に善巧撰化章以下、還相の菩薩を明す所に多く使われている。善巧撰化章以下が、天親の廻向章の内面的意義を明すことから考えても当然のことであらう。

上巻八番問答では、「普共諸衆生」の衆生は、宿業の大地を生きる極重の悪人であった。しかし、何故天親は、そのような人々と共に言い得たのであろうか。下巻では、還相の菩薩の内面的な意義を尋ね、そのことを考えてみたい。

善巧撰化章では、共を成立せしめる働きを、菩薩の巧方便廻向成就として、次のように説かれている。

菩薩の巧方便廻向といふは、謂く、説くところの礼拝等五種の修行をして集むる所の一切の功德善根をして、自身の住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かむと欲うが故に、一切衆生を撰取して、共に同じく彼の安樂仏国に生ぜんと作願せり。是れを菩薩の巧方便廻向成就と名づく。(聖全一―三三九)

ここで注目すべきことは、「共に同じく彼の安樂仏国に生ぜん」という菩薩の巧方便廻向を成就せしめる根拠が、五念門を修することに依って獲得された、「自身住持の樂を求めず」ということと、「一切衆生の苦を抜かんと欲う」という二点にあることである。これは障菩提門に至って、「一には智慧門に依りて自樂を求めず」、「二には慈悲門に依りて一切衆生の苦を抜く」と言われるように、菩薩の巧方便廻向を成就せしめる根拠は、五念門を修することに依って獲得された智慧と慈悲による。この善巧撰化章は、天親の「是の如く菩薩、奢摩他・毗婆舍那、

広略に修行して柔軟心を成就す。」という文によって開かれたものであり、『論』に依れば、この菩薩の智慧と慈悲は、奢摩他・毗婆舍那という止観双運行によって得られると言えよう。先に列記した(イ)の「奢摩他・毗婆舍那方便力成就することを得て」も、この智慧と慈悲が獲得されることの外にはなく、そこにのみ共にと言いつ得るものである。

今、曇鸞に依れば、奢摩他は次のように言われる。

奢摩他を止と言ふは、三の義有るべし。

一には、一心に専ら阿弥陀如来を念じて、彼の土に生れむと願すれば、此の如来の名号、及び彼の国土の名号、能く一切の悪を止む。

二には、彼の安樂土は三界の道に過ぎたり。若し人、亦彼の国に生じぬれば、自然に身口意の悪を止む。

三には、阿弥陀如来正覚住持の力をして、自然に声聞辟支仏を求むる心を止む。

この三種の止は、如来如実の功德従り生ず。(聖全一—三一五) また、毗婆舍那は次のように言われる。

毗婆舍那を觀と言ふは、亦二の義有り。

一には、此に在りて想を作して、彼の三種の莊嚴功德を觀ずれば、此の功德如実なるが故に、修行すれば亦如実の功德を得。如実の功德とは、決定して彼の土に生を得るなり。

二には、亦彼の浄土に生を得れば、即ち阿弥陀仏を見たてまつる。未証浄心の菩薩、畢竟じて平等法身を得証す。浄心の菩薩と上地の菩薩と畢竟じて同じく寂滅平等を得。(聖全一

#### 一三一六

ここで注意すべきことは、

(イ)、奢摩他・毗婆舍那が、どちらも彼此二土にわたる行として説かれていること。

(ロ)、奢摩他・毗婆舍那が、どちらも如来の眞実功德を根拠にしていること。

(ハ)、奢摩他・毗婆舍那が、どちらも不虛作住持功德と深い関わりを持つこと。

この三点について考えることによって、共を成立せしめる智慧と慈悲が、奢摩他・毗婆舍那によって、どうして起こるのかを考えてみたい。

『十地經』に依って大乘菩薩道を實踐しようとした天親は、恐らくその課題である自利利他が、作心を超えて成就される道を、五念門による廻向門の成就に見られていたことはまちがひなからう。その廻向門の成就に必要な欠くべからざる行として、止観双運行を見ていたにちがいない。

しかし、曇鸞は、八番問答で尋ねたような徹底した機の自覚を通して『論』を身読し、大乘菩薩道の行として説かれた五念門を、煩惱具足の凡夫の願生浄土の行として読まれている。それは、五念門が彼此二土にわたる行であり、阿弥陀の往還二廻向によって煩惱具足の凡夫の往生行となることが、巻末、覈求其本釈、他利利他の深義、三願の証に至って明らかにされている。特に、曇鸞は、五念門が凡夫の往生行であるが故に、讃嘆門に独自の意義を見出し出している。それは、八番問答に凡夫の

往生行として十念念仏が説かれ、巻末の三願的証にも同じく十念念仏が説かれていることによっても明らかである。

下巻讃嘆門を読む時、名号とは絶対無限なる如来が、衆生の虚妄性を照破せんとする（為物身）が故に、名として自己限定（実相身）をし、相対有限なる衆生の上に名告り出たものと言えよう。それは、虚妄なる衆生の自力をはるかに超えた、彼士の行と言うべきである。しかし、彼士の行に留るのではなく、無始以来の虚妄性を生きるわれわれの身の上に彼士の行のまま此土の行として実現し、衆生の虚妄性を根底から照破し、衆生の根本志願を満たすものとして働くと言えよう。ここに名号の内景である、作願、觀察が彼此二土にわたって説かれねばならなかったという、(f)の必然性を見ることができ。また、奢摩他・毗婆舍那を凡夫の上に成就せしめるものは、名号の徳である。それは、先に引用した奢摩他が、如来の本願力廻向である名号の徳によってのみ、凡夫をして心一境ならしめるという、曇鸞の独自の解釈によっても窺える。また毗婆舍那も、凡夫の上に正しく觀察門として成就するのは、浄土の真实功德による。このように見るとき、(d)もまた当然と言えよう。

しかし、衆生の境界をはるかに超えた名号を、虚妄なる衆生がいかにして如実修行相應し得るのであるか。それは、「然るに、名を称し憶念すること有れども、無明由存して所願を満てざるは何ん」と問い、「如来は是れ実相身なり、是れ為物身なりと知らざるなり。」と答え、三種の不相応を説いて、「此れと相連せるを如実修行相應と名づく。是の故に、論主建に我一

心と言えり。」と説かれるように、虚妄なる衆生が、如来の名告りを如実修行相應の行とし得る唯一の道は、純粹なる帰命願生心たる我一心の發起の外にはない。

この純粹なる帰命願生心は、国土十七種莊嚴が説かれたあと、「此の十七種の莊嚴成就を觀すれば、能く真实の淨信を生じて、必定して彼の安樂仏土に生を得るなり」と、浄土の觀察によって衆生の上に發起するものである。

「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安樂国」と自己の信心を表白する天親が奢摩他・毗婆舍那を大乘菩薩道における最も重要な行とすることも、実は、大乘菩薩道を歩む菩薩の主体を、浄土の觀察によって發起したこの純粹なる願生心に見定めているからに外ならない。それは、善巧摂化章で曇鸞が、『論』の巧方便廻向成就の文の後、その主体として、願作仏心・度衆生心を内実とする無上菩提心を説いていることによって明らかである。この願生心は、如来の真实功德たる浄土に生まれんと願うという心であると同時に、その浄土の觀察によって發起したものであった。先の觀察門も、彼此二土によって説かれ、第一義に、衆生が浄土へ得生するという如実の功德は、浄土の如実功德の働きによることが説かれている。とするなら、この願生心は、衆生に發起したままに、三界の道を勝過した如来の真实功德たる浄土にその根拠を持つものと言えよう。それは、願生心を決定づけている浄土が、衆生の願生心の所に、くつきりと影を落していると言ってもよいのではなからうか。

曇鸞は、五念門を修しそこに賜わる証果を、五功德門として

説くのであるが、その第四功德門を次のように説いている。

種種の法味樂といふは、毗婆舍那の中に、觀仏国土清淨味、撰受衆生大乘味、畢竟住持不虛作味、類事起行願取仏土味有り（聖全一三四五）

大雑把な言い方が許されるなら、曇鸞の指南に依って、願生心に確かに領かれてゐる淨土を次のように了解したい。淨土は三界の道を勝過した如来の境界であり、そこでは一切の人々が同一に念仏兄弟として集う世界である。その世界は、本願に遇い本願に依って生きる衆生の所へ直ちに開示され、その衆生をして、三宝なき場所に身を没し衆生を教化せしめて、如来を翼賛する者とせしめると。

願生心に直ちに開示される淨土を、このように了解するならば、先に尋ねて来た菩薩の智慧と慈悲は、觀察門によつて発起された願生心として働く、淨土の菩薩の徳用と言わねばなるまい。『論』の二十九種莊嚴の中に、願という字を三ヶ所見ることができ。国土莊嚴の最後、一切所求満足功德の「衆生の願樂する所、一切能く満足す。」と、仏莊嚴の最後、不虛作住持徳の「仏の本願力を觀するに、遇いて空しく過ぐる者なし」と、菩薩莊嚴の最後の「何等の世界にか仏法功德の宝無さず、我れ願わくは皆往生して仏法を示すこと仏の如くせん」の三ヶ所である。これに依れば、衆生の願が、仏の本願に遇うことにより、無生の生として淨土へ得生し、衆生の願が満たされて、本願の事業を翼賛する淨土の菩薩の願へ極まって行くと云えないであろうか。淨土の菩薩莊嚴の最後が下巻で、

四には、彼れ十方一切世界の無三宝の処に於いて、仏・法・僧宝の功德の大海を住持し莊嚴して、遍く示して如実の修行を解らしむ。偈に何等世界無・仏法功德宝・我願皆往生・示仏法如仏と言へるが故にと。（聖全一三三六）

と説かれるように、われわれの願生と雖も、三宝なき処で、「仏種をして処処に断たざらしめん」という願いに生きることにならぬ。この願生と言えども淨土の菩薩の願いに極まっていくところに智慧は、「進を知りて退を守るを智と曰う、空無我を知るを慧と曰う」、慈悲は、「苦を抜くを慈と曰う、樂を与えるを悲と曰う」と、智慧によつて自ら進んで衆生救済の道に立つことにより、二乗の自調自度の心に退却しない、また慈悲によつて一切衆生の中に身を没し抜苦与樂を行じるという具体的な智慧と慈悲の働きを見ることができ。そして、この無三宝処への往生という願いに、一切の衆生と共にという世界が開かれてゐることが思われる。

諸の衆生と共にという世界を開き、淨土の菩薩の徳用がそのまま働く、われわれの願生心は、言うまでもなく、その眼目は不虛作住持功德にある。先の毗婆舍那の二義が、

即ち彼の仏を見せば、未証淨心の菩薩、畢竟じて平等法身を得証して、淨心の菩薩と上地の諸の菩薩と畢竟じて同じく寂滅平等を得しむるが故なり。（聖全一三三二）

という不虛作住持功德を、そのまま受けていることによつても明らかである。以下不虛作住持功德によつて、共を成就せしめるものを尋ねてみたい。

不虛作住持功德は、「仏の本願力を観ずるに、遇いて空しく過ぐる者なし。能く速かに、功德の大宝海を満足せしむ」と謳われている。親鸞は『入出二門偈』で、この不虛作住持功德を、「彼の如来の本願力を観ずるに、凡愚遇うて空しく過ぐる者無し、一心専念すれば速に、眞実功德の大宝海を満足せしむ」と表わしている。また、和讃によれば、「本願力にあひぬればむなしくすぐるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし」と讃詠されているように、この不虛作住持功德を、仏の本願力に遇うという、衆生の廻心の事実を成就せしむる場所であると見られている。先に尋ねたように、衆生の願生心が觀察門によって發起され、その觀察門は不虛作住持功德にその眼目を見ることができることによつても、親鸞の教示はもつともなことである。

衆生が本願に遇うという廻心の事實は、八番問答で尋ねたように、唯除される者として自己を獲得せしめられることであつた。それは、われわれの意識をはるかに超えた存在の根源から法蔵菩薩の願力に喚び覚まされ、無始以来仏智を疑惑し続けている宿業の身を、阿弥陀仏の仏力に照し出されることによつて、その宿業の身を確かに自己とせしめられることである。自己を夢想してやまない衆生が、その夢を破つて發起した自己に目見えるということは、それを照し出す働きとして、確かに阿弥陀仏に目見えることの外にはない。

また下巻不虛作住持功德釈に、

言ふところの不虛作住持は、もと法蔵菩薩の四十八願と、今日阿弥陀如来の自在神力とに依りてなり。願以て力を成ず、力以て願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず。力願あひ府ふて、畢竟じて差はざるが故に成就と曰ふ。(聖全一―三三二)と、三界を勝過した浄土が、法蔵菩薩の願力に依つて成就され、阿弥陀仏の仏力に依つて住持されるという、願力と仏力とのダイナミックな働きとして表わされている。廻心によつて發起した我一心の内景が、先の願力と仏力との働きであることを思う時、衆生を超越した浄土が不可思議にも、宿業の身のままに、願生心の内実としてわれわれの方へ来ていると言えよう。そこでは宿業の身という徹底した自覚の故に、限りなく浄土を願生すると同時に、その願生心の所に、どこへも往生していく必要のない、確かな浄土を内観していると言える。それは、「至心に廻向したまへり。彼の国に生ぜんと願ぜば、即ち往生を得、不退転に住せん。唯五逆と正法を誹謗するをば除く。」という本願成就文に端的に見ることができるといふ。

願偈大意章で、『論』の大意が観見願生にありとし、起観生信章で、「云何が観じ、云観が信心を生ずる。」と問い、「若し善男子善女人、五念門を修して、行成就しぬれば、畢竟じて安楽国土に生じて、彼の阿弥陀仏を見ることを得となり。」と言われる浄土における見仏が、この不虛作住持功德で、自己の獲得と一如の形で成就していると言える。

そこでは、「未証浄心の菩薩も、畢竟じて平等法身を得証し



て」「法生三昧を得て」作心を超えて自利利他の行を成就することが、下巻不虛作住持功德に説かれている。それは、

未証淨心の菩薩とは、初地已上七地已還の諸の菩薩なり。

此の菩薩亦能く身を現じて、若しは百、若しは千、若しは万、若しは億、若しは百千万億の無仏の国土に仏事を施作す。要ず作心を須いて三昧に入る、乃ち能く作心せざるには非ず。作心を以ての故に名づけて未得淨心と為す。

此の菩薩、安樂淨土に生ぜむと願ひて、即ち阿彌陀仏を見たてまつる。阿彌陀仏を見たてまつる時、土地の諸の菩薩と畢竟じて身等しく法等し。龍樹菩薩、婆藪槃頭菩薩の輩、彼に生ぜむと願するは、当に此れが為なるべしならくのみ。

(聖全一―三三三)

と説かれ、宿業の身のままに大乘菩薩道を成就しているのである。このように觀察門における我一心の発起の所に、すでに廻向門を成就している。この不虛作住持功德は、もともと阿彌陀如来の威神功德を表わす所であるが故に、この衆生の菩薩としての働きは、当然阿彌陀如来の威神力にあることである。曇鸞は、卷末に至るまで如来の本願力廻向としてそのことを明らかにしようとするのである。

さて、ここで最も注意をしておかねばならないことは、本願との値遇を縁として獲得された自己が、宿業の身であるということである。実は、この宿業の身こそが、まさしく如来をして如来たらしめ、淨土とならしめたものである。

仏本此の莊嚴清淨功德を起したまふ所以は、三界は是れ虚

偽の相、是れ輪転の相、是れ無窮の相にして、蜈蚣の修環するが如く、蚕繭の自ら縛る如くなり、哀れなるかな、衆生此の三界顛倒の不淨に縮るを見そなはして、衆生を不虛偽の処に、不輪転の処に、不無窮の処に置いて、畢竟安樂の大清淨処を得しめむと欲めす。是の故に此の清淨莊嚴功德を起したまふなり。(聖全一―二八五)

と清淨功德に説かれるように、二十九種莊嚴の一つひとつに、如来をして淨土とならしめた、衆生の実相が説かれている。また性功德に、

亦、性と言ふは是れ聖種性なり。序めは法蔵菩薩、世自在王仏の所に於て、無生法忍を悟れり。爾の時の位を聖種性と名づく。是の性の中に於て、四十八の大願を發して此の土を修起せり、即ち安樂淨土と曰ふ。是れ彼の因の所得なり。果の中に因を説く故に、名づけて性と為す。(聖全二―二八七)

と説かれるように、如来が正しく如来たろうとして、苦惱の衆生海に法蔵菩薩として身を沈め、淨土を成就して一切の衆生と共に仏道に向わしめるという如来の大悲心を發動せしめるものこそ、われわれの苦惱の実相である。したがって、その如来の大悲心を内観することができる唯一の契機は、自己を宿業の身として信知せしめられることの他にはない。いや、もっと積極的に、宿業の身なればこそ、そこに期せずして起こってきた本願の信に、やむことなき如来の大悲心を内観することができると言えよう。何故なら、如来が如来たらんとして法蔵菩薩となり、衆生海へ身を没し淨土となることによって、正しく如来た

ることを成就しようという、願力と仏力との無限の働きの願生心の内実であり、それがそのまま如来の大悲心の現動に外ならないからである。実は、この如来の智慧によって宿業の身なることを知らしめられ、やむことなき如来の慈悲に生きる身となることこそ、先に尋ねて来た菩薩の巧方便廻向を成就せしめる菩薩の智慧と慈悲に外ならない。それは、救われない者として一切の衆生を共とし、救われないが故に無限に仏になる道を歩む願生心の内景である。

しかし、どうして救われない者として一切の衆生を共にと言い得るのか、今少し考えてみたい。

本願との値遇は、深い悲歎の中に、無始以来の流転の事実の一切が無駄でなかったという感動を引き起こしつつ、宿業の身のままに何一つ加減する必要のない自己として、それを信知せしめられることである。それは、われわれの意識をはるかに超えた自己の尊厳性への領きと同時に、宿業に喘ぐ一切の人々の尊厳性を領くことでもある。それは、自己の宿業の身が、誰とも肩代りできない一人として自覚されているように、一切の人々の独自性もまた確かに領かれていると言えよう。妙色功德釈に、

有る国土を見そなわずに、優劣不同なり、不同なるを以ての故に高下以て形とす、高下既に形なれば是非以て起る、是非既に起れば長く三有に淪む。(聖全一―二八九)

と、起こるはずのない差別、区別を内実とするわれわれの生活の根源は、「優劣不同なり」と言い切られている。異なるも

のが不同のままに、しかもその尊厳性を領く。それは、法蔵の願心に喚び覚まされて獲得した自己の信願と一如の形で、法蔵の願心に無条件に信頼されているという確信があるように、宿業に喘ぐ一切の人々の根源に働く法蔵菩薩の本願への信頼である。そこでは一切の人々の独自性を認めながら、しかも無条件に共と言い得る国土を持つことである。それが最初に列記した、

(三)、夫れ衆生は別報の牀と為す。国土は共報の用と為す。

(聖全一―三三八)

ということではなからうか。このように、願生心と言えども、宿業に喘ぐ人々の悲しみ苦しみの根源に働く、祈りとも言うべき法蔵菩薩の願心へ還帰することの外にはない。そこでは、生きとし生ける者の悲しみ苦しみを、無条件に共にすることのできる世界であり、それこそ、本願によって成就されている群萌の一乗とも言うべき広やかな国土と言えよう。ここに差別の外にはないわれわれの生き様の中に、一切の人々の独自性を認めながら、確かに共にと言え世界を観知することができるのである。

更にもう一つ考えたいことは、共にという正しい人間関係の成就した所にのみ、真の自由である無碍道が開顯されるということである。

曇鸞は卷末に至って、『論』の利行満足章の「菩薩、是の如く五念門の行を修して、自利利他して速かに阿耨多羅三藐三菩提を成就したまえることを得たまえるが故に。」に、不虛作住持功德の「能く速かに功德の大宝海を満足せしむ」の「速」を

見出し、利行満足章の菩薩の本願力の根拠が、不虛作住持功德の仏の本願力であることを、覈求其本釈、他利利他の深義、三願的証で明らかにしている。

そして、阿耨多羅三藐三菩提を無上正遍道とし、その語義を、『華嚴經』と『涅槃經』に依って、

道とは無尋道なり。經に言く、十方無尋人の一道より生死を出ずといへり。一道とは一無尋道なり。無尋とは謂わく、生死即ち是れ涅槃と知るなり。是の如き不二の法門は無尋の相なり。(聖全一―三四六)

と言う。これに依れば、不虛作住持功德の「満足功德大宝海」と言うことも、生死海を生きる宿業の身のままに、「生死即涅槃」と信知せしめられることである。親鸞は『一念多念文意』で、「金剛心のひとは、しらずもとめざるに、功德の大宝そのみにみつる」と言われるように、その智慧は、われわれの思議分別を破って願生心に自然に働く如來の無上涅槃の徳用である。われわれの思議分別をはるかに超えた如來の智慧が、宿業の身の上に不可思議にも願生心として具体的に働くことを明らかにしたのが、この無碍道の開顯であらう。それはまた、「煩惱を断ぜずして涅槃分を得」と語られるように、大乘の仏道の究極的祈求である大涅槃の証得を内に観知しているものと言える。

鸞鸞が巻頭で、「此の無量壽經優婆提舎は蓋し上衍の極致、不退の風航なる者なり。」と言われるように、願生浄土の道こそ、具体的なわれわれの生死海に大乘の仏道を成就するものである。そこでは、一切仏法ならざる世界はないという、まさしく大乘

の大地に生き、三宝なき世界で仏種をして処処に断たざらしめんという願いに生きるものとして無限に仏道を歩むのである。

☆ ☆ ☆

越後への流罪を契機として、親鸞は、この現実のただ中で、共に生きる人々と共に救われるという救いの事実は何なのかという問いを、改めて師教に問い直したに違いない。その新たな聞思から、確かに確かめ得た願生浄土の道は、今まで尋ねたように、単に個人の救済に留めるのではなく、愚に帰って、一切の人々が安んじることのできる群萌の大地を、現実のただ中に獲得することであった。それは、法蔵菩薩の本願によって成就されている大衆の發見である。そこでは、一人として眞実を求めないものはないという絶対の信頼によって、一切の人々を敬い(諸仏供養)、一切の人々を徹底して捨てない(開化衆生)という浄土の菩薩の願いを生きることとなるのである。

さまざまな諸事情があったにせよ、流罪の赦免後、関東の人々の中に身を没し、教化活動に身を呈していた親鸞をつき動かしたのもこそ、三宝なき処で、仏種をして処処に断たざらしめんという浄土の菩薩の願いであつたに違いない。『教行信証』も、

『安樂集』に云はく、眞言を採り集めて、往益を助修せしむ。何となれば、前に生れむ者は後を導き、後に生れん者は前を訪ふらへ、連続無窮にして、願はくは休止せざら使めむと欲す。無辺の生死海を尽さむが為の故なり、と。

(聖全一―二〇三)

執筆者住所が掲載されているため  
リポジット非公開とする。

で結ばれていることも、またその願いの表われである。このように親鸞の生涯は、浄土の菩薩の願いに貫かれていると言える。そしてその願いに生きることそのまま、不行の行として自利利他の行を満足し、愚のままに資格なくして大乘の菩薩道

を担う者として、無限に仏に成る道を歩むこととなるのである。愚禿釈親鸞という名告りに、このような無上仏道が開顕されていることが思われる。